

鯨 研 通 信

第 370 号

1987年 9 月

財団法人
日本捕鯨協会

鯨類研究所 〒 136 東京都江東区大島 3 丁目 32 番 11 号

電話 03 (683) 3621 (代表)



日 本 海 軍 と 鯨

遠洋水産研究所 大隅 清 治

日本海軍と鯨または捕鯨とは海という場を共通するので、当然ながら昔から種々の面で深い係りを持っていた。その中で軍艦に関係した3つの話題についてここで扱うことにする。戦後一般に知られるようになった、海軍と鯨の鳴音その他の生理・生態との関係などの話題については機会があれば改めて記述したい。

鯨の名の付いた軍艦

日本帝国海軍の保有していた多数の艦艇の中に、鯨、という字を艦名に持つ軍艦が3隻（初代を入れると4隻）あった。それらは、「迅鯨（じんげい、初代、二代）」、「長鯨（ちょうげい）」、そして「大鯨（たいげい）」である。

日本帝国海軍の艦艇は艦種によって共通の意味の名を付ける習慣があった（戦艦には国名、重巡洋艦には山名、軽巡洋艦には川名のように）。航空母艦には、竜、鳳、鷲などの空を飛ぶ勇ましい動物の名が付けられることが多かった。これに対して、鯨の名の付いた上述の3隻の軍艦はいずれも潜水母艦であった。潜水母艦には潜水艦と同じように海に潜る大きな動物である鯨が用いられたのであろう。因みに潜水艦には「イ21号」のように番号名だけが付けられていた。太平洋戦争の開始前後には日本海軍は5隻の正式潜水母艦を有していたが、鯨の名の付かなかった「駒橋」と「剣埼」の2隻はいずれも最初は他の艦種を目的として建造されたが、その後潜水母艦に改造された軍艦であり、建造時の名がそのまま使われたためである。

潜水母艦は日本海軍が初めて潜水艇を就役させた1905年から使用を始めた。潜水母艦の解説をするのがこの文章の目的ではないので詳細は省略するが、1920年頃までの潜水母艦は潜水艇の乗組員の居住や休養を任務としたため、旧式軍艦や商船を改造して利用する

ことが多かった。初代の「迅鯨」は図1に示すように、排水量1,464トン、1,400馬力の木造の外輪船であり、恐らく輸入した商船を改造したものであろう。

1922年以後の八八艦隊計画で多数の中型潜水母艦が建造されると、潜水戦隊の旗艦兼母艦の性格を持つ専用艦が建造された。それが「迅鯨（二代）」、「長鯨」、「大鯨」の3隻であった。「迅鯨（二代）」は日本海軍初の新造潜水母艦であり、1923年8月30日に三菱造船長崎造船所で竣工し、排水量6,600トン、タービンエンジン7,500馬力、18ノットで、潜水母艦としての設備はもとより、14cm砲2門、艦載機1機を装備していた（図2）。「迅鯨」は第一潜水戦隊旗艦として永く連合艦隊に編入されていたが、中日戦争に入ってから工作艦任務や練習艦ともなった。太平洋戦争の前期は第一線で活躍し、後期は練習艦隊母艦となり、輸送用にも使われたが、1944年10月10日庵美大島付近で米軍航空機による攻撃を受けて沈没した。

「長鯨」は「迅鯨」の同型艦として、それより遅れて1924年8月2日に同じ三菱造船長崎造船所で竣工した（図2）。太平洋戦争終戦時にも生き残ることが出来たが、戦後は輸送艦として復員業務に従事した後、解体された。

「大鯨」は海大型潜水艦の発達に伴い、その戦隊の旗艦兼母艦を平時任務とする目的で、1934年3月31日に横須賀海軍工廠で竣工した。この艦は基準排水量10,000トン、ディーゼルエンジン14,000馬力、速力20ノットであり、12.7cm連装高角砲2門、艦載機3機を装備していた。「大鯨」は有事の際には航空母艦に改造し得るように初めから設計されていたため、図3に見るような奇妙な格好をしていた。そして、太平洋戦争が勃発した翌年の1942年に空母に改造され、「竜鳳（りゅうほう）」と改名した。終戦時には航行不能の

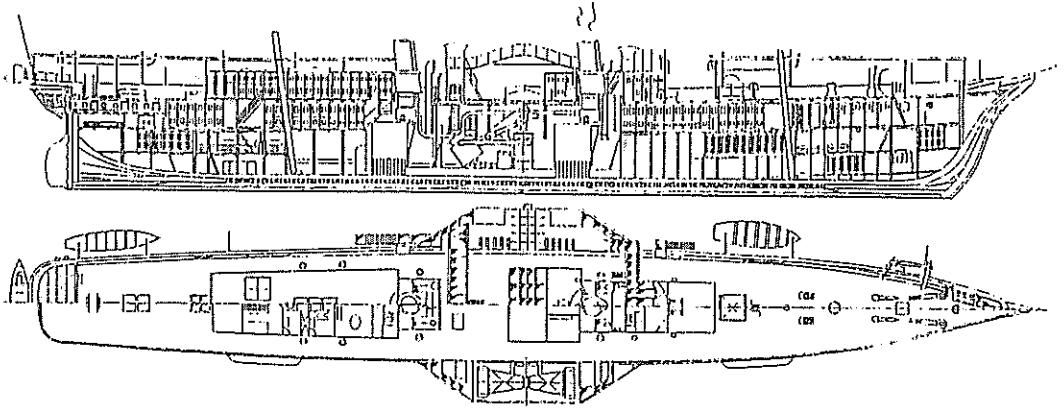


図1. 初代潜水母艦「迅鯨」

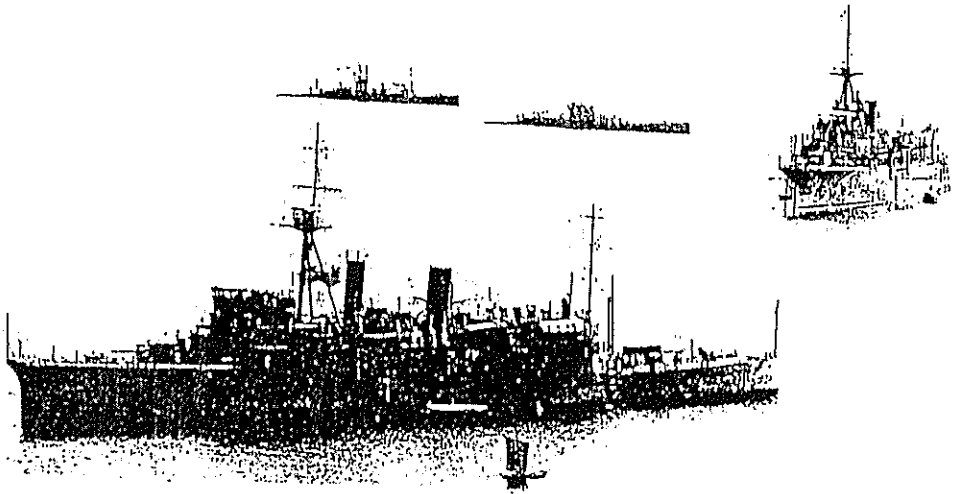


図2. 二代潜水母艦「迅鯨」(手前)と「長鯨」(右端)



図3. 潜水母艦「大鯨」

状態で呉軍港に係留されていたが、後に解体されて短い生命を終えた。

蛇足ながら、5 隻の正式潜水母艦に加えて、1941年春から 7 隻の 1 万トン級客船が海軍に徴用され、特設潜水母艦として改装されて、戦いに参加したことを記録しておく。

徴用された捕鯨船

日本の捕鯨業は古く鎌倉時代から高速の軍船や鉾の発達とともに技術開発がなされ、わが国独特の多数の捕鯨船の協同操業による突き取り式や網取り式による捕鯨業が発達したが、各藩の領主が捕鯨をおおいに奨励し保護したのは、有事の際には捕鯨船とその乗組員を水軍に動員出来るというメリットを高く評価していたからである。すなわち、わが国の捕鯨と海軍とは昔から密接な関係を有していたのである。

近代捕鯨時代に入っても、この関係は同じであった。わが国の近代捕鯨は明治中期から技術を導入して次第に発展し、1934年には捕鯨船団が南水洋に進出するまでになった。そしてそれ以後急速に捕鯨母艦と捕鯨船を増強し、1938/39漁期には 6 船団が南水洋に出漁するに至った。しかし、それまでに第二次世界大戦が勃発し、日本海軍は1941年の秋から太平洋戦争の準備のために捕鯨母艦や捕鯨船を次々に徴用した。

1941年秋から1942年秋の間に日本の捕鯨業が保有していた 6 隻全ての捕鯨母艦が海軍に徴用され、特設輸送船となり、その巨体を利用して重油を積む他、広い上甲板と船内に各種物質を搭載して、軍事輸送に従事した。図 4 は徴用されて海軍特設輸送船としてシンガポール東方海面を内地に向かう第二図南丸のありし日の姿である。

それらの 6 隻の徴用捕鯨母艦は残念ながら、1943年から1944年の間に米軍の攻撃に会って次々に沈没して、日本は全ての捕鯨母艦を戦争によって失ってしまった。次表は帝国海軍によって徴用された日本の捕鯨母艦の被害状況を示す

母船名	徴用年	沈没日付	沈没位置
図南丸	1942	1943・11・28	仏印沖
第二図南丸	1941	1944・8・22	南支那海
第三図南丸	1941	1944・2・20	トラック島
日新丸	1942	1944・5・16	バラバック水道
第二日新丸	1942	1943・4・16	石垣島
極洋丸	1941	1943・9・19	庵美大島名瀬港

この中で、トラック島で沈没した「第三図南丸」だ

けは、戦後の1950年10月から引き揚げを初め、1951年 4 月に内地に曳航し、直ちに修理し、「図南丸」と改名してその年の秋の南水洋捕鯨に再び出漁することが出来たのは喜ばしい限りである。

戦争によって海軍に徴用されたのは捕鯨母艦ばかりではない。多くの捕鯨船もまた軍艦として活躍し、そしてその多くが犠牲となった。戦争中に沈没または行方不明になった日本の捕鯨船の数は67隻に達したと記録されている。

徴用された捕鯨船は改造されて、特設掃海艇または特設駆潜艇となった。図 5 は特設掃海艇となった第二利丸であり、掃海設備を完備し、かつ駆潜艇としての能力も備えて、第44掃海隊を編成して南方海域で活躍した。また、特設駆潜艇となった第七昭南丸は太平洋戦争開始直前に特設艇としての工事を完成し、前マストとブリッジの間に爆雷投射機、艇尾には同投下軌条を施設した他、軍艦らしく大砲も船首に備えていた。

太平洋戦争で敵と戦ったのは徴用された捕鯨船ばかりではない。戦時中も細々と操業が許されていた捕鯨船も、敵艦や敵機を発見した際には直ちに通報することはもちろん、操業中でも爆雷攻撃が出来るような設備がなされて戦争に間接的に参加し、実際に敵と交戦したり、撃沈されたりした捕鯨船が多数あった。

戦争時には多数の捕鯨船関係乗組員が海軍に軍人、あるいは軍属として加わった。そして、その間にそれらの多くの尊い人命が失われ、捕鯨業は物的にも人的にも大きな打撃を戦争によって被ったことを忘れてはならない。

太平洋戦争によって日本はさらに、台湾、朝鮮、樺太、千島に存在していた多くの外地捕鯨基地と捕鯨場をも喪失することになった。

捕鯨に寄与した日本海軍

戦争は捕鯨業に大きな打撃をもたらすが、逆に海軍が捕鯨に寄与する側面もわずかではあるが、ないことはない。

ロシアは1891年に露国太平洋漁業株式会社をウラジボストックに設立して、朝鮮海域において近代捕鯨法による操業を開始した。この捕鯨はわが国に大量の鯨製品を輸出し、それがわが国の近代捕鯨の導入の大きな動機になったのであるが、1904年に日露戦争が開始されると、日本海軍は直ちに露国太平洋漁業株式会社所属の捕鯨船隊を拿捕した。それらは運搬船アレキサンダー号、レスニー号、解剖処理船ミハイル号、捕鯨船ニコライ号であった。捕鯨船ギオルギ号だけは上海に逃がれて拿捕をまぬがれた。この戦争によって朝鮮

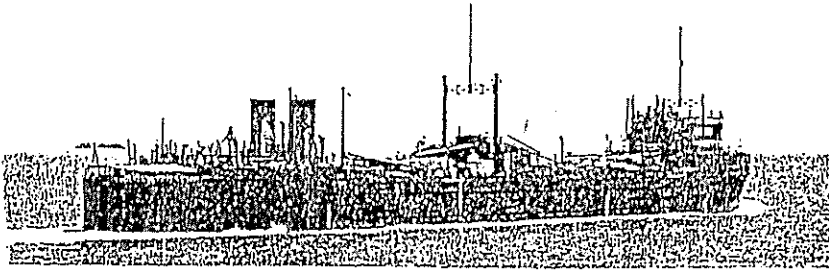


図4. 徴用された「第二函南丸」

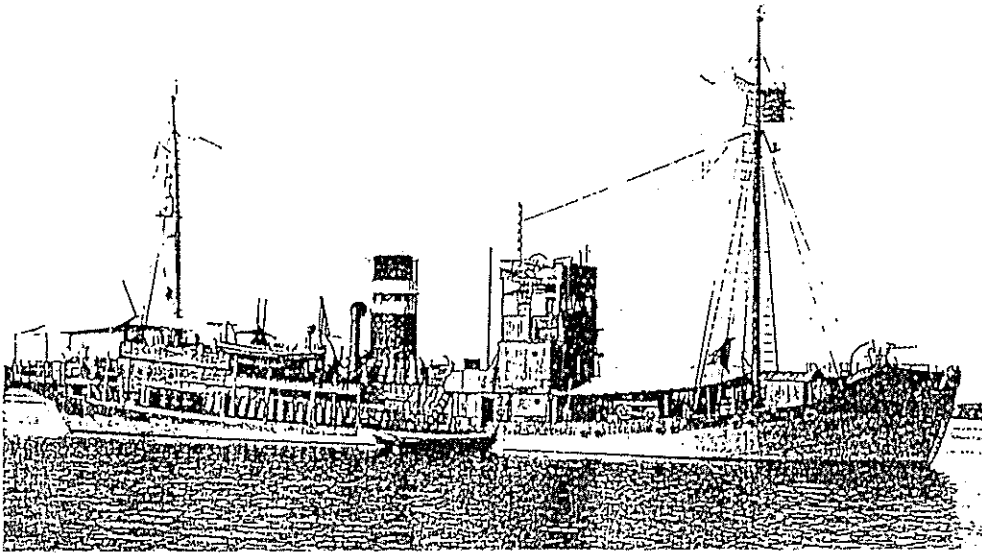


図5. 特設掃海艇となった「第二利丸」

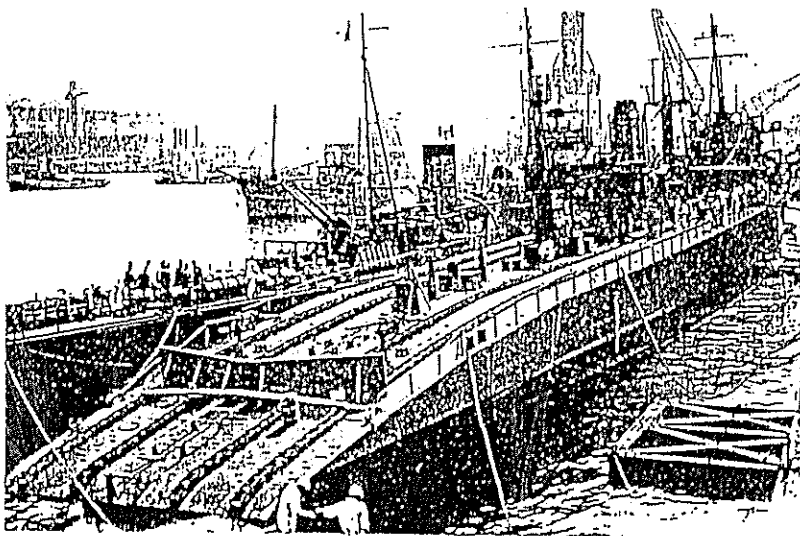


図6. 輸送艦「第九号」

の捕鯨漁場からロシアの捕鯨は駆逐され、その漁場はわが国の捕鯨業の独壇場となっただけでなく、捕獲した捕鯨船隊の払い下げを政府から受けて、わが国近代捕鯨はその戦争によって基盤をがっちり固めることになったのである。

日清、日露の両戦争はまた台湾、朝鮮、樺太、千島を領有する結果となり、日本の近代捕鯨業はそれらの外地に次々に捕鯨基地を設置して、さらに発展を遂げるようになった。強大な日本海軍が外地の制海権を握って、外地捕鯨を防衛した一方では、外地で操業していた捕鯨組織がそこに駐屯して国防に寄与した面もおおいにあった。

太平洋戦争はわが国の捕鯨業のほとんどを破壊したが、海軍艦艇が戦後の捕鯨業の復興に寄与することに

なった。日本を占領した連合軍総司令部は戦後直面した食糧危機の打開のために、捕鯨業をいち早く復活させた。その一環として、小笠原諸島における母船式捕鯨を1945年11月に許可した。そして、全ての捕鯨母船を失っていたので、残存していた海軍の特別輸送艦「第19号」の母船としての使用を許可したのである。次いで翌年に特別輸送艦「第13号」、「第16号」、1947年には「第9号」を提供した。図6は戦時中における輸送艦「第9号」である。艦尾の運貨船発進用の斜路がスリップウェイとして利用された。さらに、1946年には南水洋捕鯨の再開の許可も出され、その母船として、戦争中に沈没をまぬがれた戦時標準型油槽船を入手して改造し、「橋立丸」と「第一日新丸」をその年に出漁させることが出来たのである。

福岡市室見川河口に漂着したオガワコマッコウ

下関市	白木原 美 紀
北九州市立自然史博物館	藪 本 美 孝
北九州市立自然史博物館	岡 崎 美 彦
水産大学校	白木原 国 雄

1987年4月7日、福岡市室見川河口にオガワコマッコウ (*Kogia simus*) が生きてそのまま漂着した。日本沿岸におけるコマッコウ属の漂着・捕獲例は少なく(小川, 1936—37; Yamada, 1954; Omura *et al.* 1981; 柳沢, 1986; 白木原ら, 1986)、まして新鮮な個体の外部形態が記載された例は限られている。今回の漂着個体はまさに新鮮な状態で北九州市立自然史博物館に運ばれ、全身標本として保存された。全身の傷を除けばほぼ完全な標本であり、おそらく全国的にも例のない貴重なものである。これに関する詳細な生物学的研究は今後の課題として、ここでは発見から標本処理までの経緯と外部形態に関して得られた若干の知見を記す。

1. 発見から標本作成まで

4月7日早朝、室見川河口の浅瀬で暴れている1頭の鯨が、近隣在住の小川鏡さんによって発見された。小川さんは鯨を押して沖に掃そうと試みたが、まもなく鯨は斃死した。鯨は陸上に引き揚げられ、近くの姪浜魚市場に運ばれた。そして九州大学農学部木村清朗助教授によりコマッコウ属の鯨であることが確認され

た。木村先生からこの情報を提供された北九州市立自然史博物館がさっそく小川さんと姪浜魚市場に鯨の寄贈を願い出たところ、快く承諾された。鯨は翌日の午後に同館に收容され、博物館職員と水産大学校関係者によって写真撮影、外部計測が行われ、ホルマリン標本として保存された(標本番号KMNHVR100.002)。

2. 外部形態と種の同定

漂着個体は、体長2,480mmの雄で、背面は黒色、腹側に向かってしだいに淡色となり、腹面は白色であった(図1)。全身に見られた傷は浅瀬で暴れた時だったのであろう。背びれは体のほぼ中央に位置していた。また喉に短い溝が4本見られた(図2)。外部計測はOmura *et al.* (1984)を参考にして行われた(表1)。なお眼と胸びれの間コマッコウ属特有の模様が認められた(図3)。Yamada (1954)は日本産とアメリカ産とでこの模様が異なることを指摘しているが、この問題ははまだ解決していない(大村, 1984, 1986; Omura *et al.*, 1984)。今回の標本の模様は、Hubbs (1951)の報告したアメリカ産のものよりYamada (1954)の報告した太地産のものに類

似していた。

種の同定は Leatherwood *et al.* (1982) に従って行われた。コマッコウ属には、コマッコウ (*Kogia breviceps*) とオガワコマッコウ (*Kogia simus*) の2種が認められている。本個体は、喉に溝があること、体長が2.7 m以下であること、背びれが体の中央部付近にあり、その高さが体長の5%以上であることから、オガワコマッコウと同定された。

3. おわりに

漂着したオガワコマッコウが迅速に標本として保存されたことは、福岡県周辺に鯨に関心を持つ人が多く、漂着鯨類に対する情報網が張り巡らされていることの成果と思われる。実際、北九州市立自然史博物館、水産大学校は漁業協同組合などの協力を得て、漂着鯨類に関する情報を集めている。また海岸に打ちあがった漂着物が収集され、その中で数種の鯨類が報告されている(石井, 1977; 嶺井, 1981)。

オガワコマッコウを博物館に寄贈してくださった小川鏡氏、姪浜魚市場にお礼申し上げる。貴重な情報を提供してくださった九州大学農学部木村清朗助教授に感謝の意を表す。また鯨類研究所大村秀雄所長ならびに北九州市立自然史博物館太田正道館長に日頃のご指導を深謝する。

引用文献

- Hubbs, C. L., 1951. Eastern Pacific records and general distribution of the pygmy sperm whale. *J. Mamm.*, 32(4): 403—410.
- 石井忠, 1977. 漂着物の博物誌. 西日本新聞社, 福岡. 257pp.
- Leatherwood, S., R.R. Reeves, W.F. Perrin and E. Evans, 1982. Whales, dolphins, and por-

poises of the Eastern North Pacific and adjacent Arctic waters. A guide to their identification. *NOAA Technical Report NMFS Circular 444*. 245pp.

- 嶺井久勝, 1981. 北部九州沿岸に漂着した動物相
2. 日本動物学会・植物学会・生態学会九州支部(地区)合同大会講演要旨: 53.
- 小川鼎三, 1936—37. 本邦の齒鯨に関する研究VI. *Cogia* 属. 植物及動物, 4: 2017—2024, 5: 25—28.
- Omura, H. and Y. Takahashi, 1981. A pygmy sperm whale stranded at Tokaimura, Ibaragi, Japan. *Sci. Rep. Whales Res. Inst.*, 33: 119—124.
- Omura, H., M. Shirakihara and H. Ito, 1984. A pygmy sperm whale accidentally taken by drift net in the North Pacific. *Sci. Rep. Whales Res. Inst.*, 35: 183—193.
- 大村秀雄, 1984. コマッコウ. 鯨研通信, 358: 119—120.
- 大村秀雄, 1986. 続・コマッコウ. 鯨研通信, 361: 20—22.
- 白木原国雄・白木原美紀, 1986. 下関のコマッコウ駆動. 鯨研通信, 361: 19—20
- Yamada, M., 1954. Some remarks on the pygmy sperm whale, *Kogia*. *Sci. Rep. Whales Res. Inst.*, 9: 37—58.
- 柳沢踐夫, 1986. 那智勝浦町浜ノ宮海岸に打ち揚がったオガワコマッコウ. 南紀生物, 28(1): 22.
- 鯨研・大村付記
本文に書いてある通り、コマッコウ属の測定例は少ないから、表に記載されている測定値は貴重な資料で

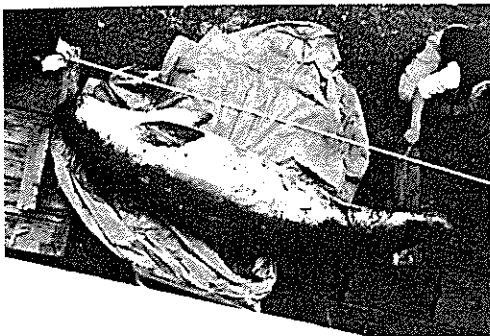


図1. 計測中のオガワコマッコウ



図2. 喉の溝

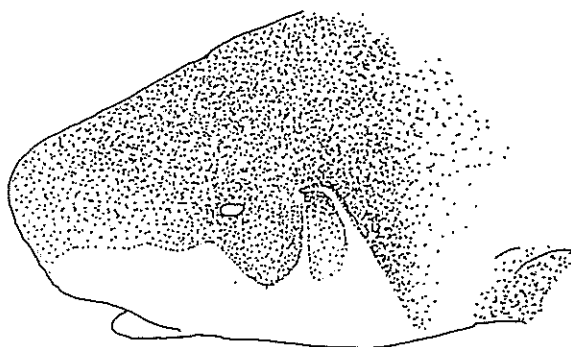


図3. 眼と胸びれの間の白い模様

表 1. オガワコマッコウの外部計測 (北九州市標本及びのとじま標本)

Measurements	Kitakyusyuushi specimen (male)		Notojima specimen (male) *	
	in mm	% of total l.	in mm	% of total l.
1. Tip of snout to notch of flukes (total length)	2480	100	2620	100
2. Tip of snout to center of eye	205	8.3	210	8.0
3. Tip of snout to ear	—	—	280	10.7
4. Center of eye to ear	—	—	70	2.7
5. Tip of snout to blowhole	200	8.1	200	7.6
6. Tip of snout to ant. insertion of flipper	410	16.5	390	14.9
7. Tip of snout to ant. insertion of dorsal fin	1080	43.5	1070	40.8
8. Tip of snout to tip of dorsal fin	1460	58.9	—	—
9. Length of gape	124	5.0	110	4.2
10. Length of blowhole	—	—	50	1.9
11. Width of blowhole	—	—	—	—
12. Length of eye	30	1.2	30	1.1
13. Tip of snout to umbilicus	930	37.5	900	34.4
14. Tip of snout to midpoint of genital slit	1085	43.8	1180	45.0
15. Tip of snout to anus	1635	65.9	1750	66.8
16. Projection of snout beyond lower jaw	120	4.8	160	6.1
17. Half girth on transverse plane at eye	483	19.5	—	—
18. Half girth on transverse plane at axilla	666	26.9	—	—
19. Half girth on transverse plane at ant. insertion of dorsal fin	766	30.9	—	—
20. Half girth on transverse plane at umbilicus	762	30.7	—	—
21. Half girth on transverse plane at anus	516	20.8	—	—
22. Length of flipper, ant. insertion to tip	384	15.5	420	16.0
23. Length of flipper, axilla to tip	271	10.9	270	10.3
24. Maximum width of flipper	151	6.1	140	5.3
25. Width, base of flipper	168	6.8	180	6.9
26. Height of dorsal fin	196	7.9	210	8.0
27. Length of dorsal fin	380	15.3	400	15.3
28. Width of flukes, tip to tip	680	27.4	750	28.6
29. Notch of flukes to tip (right)	414	16.7	370	14.1
30. (left)	428	17.3	—	—
31. Anterior insertion of flukes to notch	244	9.8	250	9.5
32. Anterior insertion of flukes to tip (right)	573	23.1	(left) 490	18.7

*現在、この標本はのとじま臨海公園水族館に骨格標本として展示されている由である。

ある。ここで思い起して載きたいのは、鯨研通信第361号（1986年、1月）に掲載された私の小文「続コマッコウ」である。この中で私はのとじま臨海公園水族館の標本をオガワコマッコウ *Kogia simus* としたが、その理由は、この時書いた通り、歯の数、その他背ビレの位置とかその高さなどから判断したものであった。それは当時のとじま臨海公園水族館に出向しておられた西一広さん（現在は金沢水族館）から提供された資料に基づいたものであった。但し、その時は当方の手落ちというよりも、ページ数をケチったため、

全部の測定値を印刷しなかったことである。

今回はちょうどよい機会であるから、関係の皆さん方の了解を得て、本文の表1にこの測定値を加えさせて載くこととした。測定者は、西一広さんである。パーセントは当方で計算した。

（編集部注）この記事で取り扱われた福岡市に漂着したオガワコマッコウは、ストランディング・レコードにO-8として報告されたものです。

ストランディング・レコードー 7

番号	日付	種類	頭数	場所	報告者	備考
O-10	17/06/87	アカボウクジラ	1	伊豆西海岸 大瀬崎沖	中島将行 山田二郎 前嶋謙次 (伊豆三津シー パラダイス)	体長4m、雄。沖で 瀕死のものを漁船が 発見。その後死亡し たものを沼津港へ曳 行。
O-11	16/07/87	アカボウクジラ	1	沼津市 千本浜	藤巻康年 増田 均 (伊豆三津シー パラダイス)	体長5.4m、雌。
O-12※	16/07/87	アカボウクジラ	1	静岡市 大浜海岸	宮下富夫 (遠水研)	体長6.7m、雄。

※：この個体を取り扱った朝日新聞の記事（7. 17付）を上記、藤巻さんよりお送りいただきました。

（鯨研・吉岡）